

「炎重工技報」創刊の挨拶

代表取締役 古澤 洋将

平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼を申し上げます。当社は、東日本大震災からの復興を胸に抱き、頭上に独自の発想を、両手には誠意と技術を持ち、2016年2月に岩手県滝沢市にて設立されました。前身は、代表取締役が2004年に興した農業組織NEXTFOODSの開発部門であります。本技術機関誌「炎重工技報」の創刊にあたり、挨拶を申し上げます。

科学技術の歴史を紐解くと、1837年にフランス人の経済学者ジェローム＝アドルフ・ブランキが、1700年代後半のイギリスで興った蒸気機関による工業化を産業革命と初めて名付けました。それ以来、日本も産業革命とは無縁でなく、1862（文久2）年に江戸幕府老中の小栗上野介忠順は、駐日フランス公使レオン・ロッシュらと共に近代的な製鉄所の建設案を作成し、1865（慶応元）年には横須賀製鉄所を建設しました。次いで釜石製鉄所、八幡製鉄所など日本各地に製鉄所が作られ、明治の造船産業、大正の航空機産業、昭和の自動車産業などを支えることになりました。近現代史を振り返ると、世界の国々の勃興は例外なく科学技術によって行われております。

さて、2011年3月に東日本大震災（死亡・行方不明者18,446名）が発生してから、東北地方の太平洋沿岸を中心に地域経済は破壊されてしまいました。近現代史に習えば、このような大震災からの復興に必要なのは、21世紀を切り開く新しい科学技術であると言えます。ここで、今日の私どもを取り巻く環境を眺めてみますと、1990年代から飛躍的に発展したコンピュータとネットワーク技術を基礎に、2000年から自律移動型ロボットや自動車が広がりを見せ、汎用人工知能の実現をも期待されています。また、人々の通信手段も飛躍的に発展して、いつでもどこでも電話や電信（メール）ができ、SNSといったコミュニティ・ネットワークが人間の社会生活の一端を担っています。人類の歴史から例を探すのが困難なほど、様々な技術と情報に溢れているのが現代の特徴である、と言えるでしょう。

このような背景のもと、21世紀の現代において新しい価値を創造するには、日々の研究開発を積み重ねる方法のほかに、過去の技術や産業を現代の技術でもう一度見つめ直すという方法もあるのではないかと思います。異業種交流という言葉が生まれて久しく、例えば金融工学や生体医工学など、異分野との協業から生まれた技術や製品、サービスは数多あります。これに加えて当社は、創造的な未来を切り開き人々の喜びを広げるために、ロストテクノロジーを見つめ直し、創造的改善にも取り組んで参ります。

創刊号は、屋外ロボット開発キットに使われている汎用自律移動コントローラと、ソフトウェア・プロセスのマイグレーションができるPROCESSWARP、魚介類等の水中生物群を自由に誘導できる生体群制御の技術について、それぞれご紹介いたします。ぜひ御高覧頂き、忌憚のないご意見をお寄せ頂ければ幸甚の至りに存じます。今後、炎重工技報は年1回発行していきます。より一層の御支援・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、挨拶といたします。